

□ 次の各文の――を付けた漢字の読みがなを書け。

- (1) 新入生を部活動に勧誘する。
- (2) 飛行機の両翼が銀色に輝く。
- (3) 選手宣誓の大役を謹んで受ける。
- (4) 久しぶりの雨が、乾いた畑を潤す。
- (5) 芸術鑑賞教室で、邦楽の典雅な調べを味わう。

□ 次の各文の――を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書かいしよで書け。

- (1) 惑星探査機がウチュウから帰還する。
- (2) 庭のかきの実が、赤くジユクしてきた。
- (3) この春、新しい科学雑誌がソウカンされる。
- (4) 文化祭で発表するエンゲキの脚本を担当する。
- (5) 画期的な製品を開発して、技術者としてのカブが上がる。

□ 次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。(＊印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。)

母がガイドを務める観光ツアーに、客に知られないよう同行した「僕」は、川下りの遊覧船に乗り遅れたツアー客の男を探すよう母に頼まれた。男を見付けた「僕」は、ガイドをしながらタクシーで遊覧船を追いかけていた。男は、人の思い出に名前を付ける「題名屋」という仕事をしていた。

喋り過ぎてイガイガする喉を鎮めるためと、得意な気持が表情に出ないようにするために、僕は咳払いをした。もっと飲み物を買っ

ておけばよかったと後悔した。

「ところで君は、どうしてあれこれと、何でも詳しいのかね。」

ズボンに落ちたパン屑を払いながら、男は質問した。

「社会の時間に習ったり、ママの勉強用のガイドブックを横目で見たりして、覚えたんです。」

「じゃあやっぱり、あのガイドさんは君のお母さんなんだね。」

「なぜ分かったんですか?」

「あれだけ顔が似ていれば、誰にだって分かるさ。」

秘密を守るために払っていた細心の注意が、何の役にも立っていなかったのを知って、僕は拍子抜けした。(1)でも今さら、そんなことはどうでもいい気分だった。

何台ものキャンピングカーとすれ違った。サイクリングしている自転車の車輪に、日光が反射していた。河原では人々が、バーベキューをしたり、水遊びで濡れた服を乾かしたり、昼寝をしたりしていた。

僕はこのあたり一帯に自生する植物を紹介し、主だった名所(見張り塔、\*霊廟、動物公園……等々)の説明をしつつ、合間には石器時代から始まる歴史の概略を差しはさんだ。自分でも不思議なくらい、滑らかに喋っていた。それでいて知識がいまいなところは、間違いを口にしないよう、慎重に言葉を選ぶことができた。

けれど正直に告白すれば、ずっと緊張は続いていたのだと思う。無意識のうちに何度もポケットに手を突っ込み、ママから預かったお金を落としていないか確かめていた。(2)どんなに大丈夫だと言いつても、そうする自分を止められなかった。

時折、林に遮られることはあっても、いつでも川は僕たちの右手に見えた。ママの乗った遊覧船には、まだ追い付けなかった。

次の説明ポイントまで間があくと、僕は口をつぐみ、男が静かに風景を眺められる時間を作った。人の話ばかり聞かされたら、お客

さんだつてくたびれると、いつかママが言っていた。男は窓の縁に指を掛け、気持よさそうに風に当たっていた。運転手は鼻歌を再開した。僕たちの足元には、杖が大人しく横たわっていた。

それでもあまりに長く沈黙が続くような場合は、題名屋について質問した。

「題名は、どうやってお客さんに渡すのですか？」

「口で、だよ。」

窓から手を離し、シートにもたれて男は答えた。

「紙に書くとか、額縁に入れるとか、しないで？」

「ああ。自分だけの思い出に捧げられた題名なんだ。そんなことをしなくても、すぐに覚えられる。お客の耳元で、一言一言、慎重にしつかりと発音する。それで十分だよ。」

「小父さんのつけた題名に、満足しない人がいたら？」

「幸いにも、過去に一件のクレームもなかった。なかなか、優秀な題名屋なんだ。」

男は風で乱れた髪を整えた。

「なぜ、詩人をやめちゃったんですか？」

男は返答に困り、顎に手をやったままうつぶむいた。図々しい質問に気分を害したのか、子供でも分かる言葉を探しているのか、僕には区別がつかなかった。つまらないことを聞いてすみませんと謝ろうとした時、やっと男は口を開いた。

「詩など必要としない人は大勢いるが、思い出を持たない人間はない。」

同意を求めるように、男は僕の目を見やめた。間近で見ると、第一印象よりも老けているのが分かった。皺は深く、唇はひび割れ、呼吸が浅かった。気管支の奥の方で、骨の軋むような嫌な音が聞こえた。やはり遊覧船に乗る時、ちゃんとそばについて、手を貸してあげるべきだった。

「そうじゃないかな？」

(3) 「はい、分かります。」

彼がすっかりさせないために、あるいは、罪滅ぼしをするように、僕はそう答えた。

「あっ。」

不意に男が叫んだ。遊覧船だった。甲板にいる人影のどれがママなのかは見分けられないが、間違いなく、僕たちが乗るはずの遊覧船だった。スクリューからのびる白い波が、流線型の模様を描き出していた。

「よかった……。これで先回りできる。」

「坊っちゃん、俺に任せておけば、大丈夫なのさ。」

僕のつぶやきを聞いて運転手は、バックミラーに向かって合図を送ってきた。

「おっと、見逃すところでした。前方、丘の中腹に見えている木造建築。川下りツアー最後の名所、十六世紀に作られた武器庫です。なぜこのような場所に武器庫が必要だったか、理由は当時の勢力分布と戦法に関係があるのです。つまり……。」

僕がガイドしている間に、遊覧船は後ろへ遠のいていった。

夜の七時、湖水地帯と川下りコースツアーは、すべての日程を予定どおり終え、観光局の駐車場にて解散した。

「君にぜひ、お礼がしたいんだが。」

別れ際、男が言った。

「とんでもない。僕は何にもしてません。」

「いや。君のおかげで忘れられない旅になったよ。だから、感謝の気持を表したい。ただ、それだけなんだ。」

男の横顔は夕暮れの中で半分陰に沈んでいた。

「野球のボール、本、お菓子、何でも遠慮せず言ってくれたら助か

るよ。明日、ここを出発するまでに用意して、観光局へ預けておこう。」

「明日、帰っちゃうんですか？」

「残念だが、長居はできないんだ。予約が入っているからね。」

「そうですか……。僕……。今、特別にほしいものはないんです。ただ一つ、小父さんにお願いが……。」

ゆっくり考えてから僕は続けた。

「今日の僕の一日に、題名をつけてほしいんです。」

(4) 男は黙つてうなずき、夜の闇がすぐそこまで迫っている空の一点を見据えた。瞬きもせず、声も漏らさず、息さえ聞こえてこなかった。彼の作業を邪魔しないよう、僕はじつと動かずにいた。

やがて男は杖の先で地面を一つ叩いた。それが合図だった。長身をかがめ、僕の耳元に近付き、真つすぐ鼓膜へ届く声で言った。

「『思いつく持たない人間はいない』」

(5) それが題名なのだと、すぐに分かった。今日一日を記憶に刻み付けておくための、僕の題名だと。

(小川洋子「ガイド」による)

〔注〕 靈廟——先祖などを祭った建物。

〔問1〕 (1) でも今さら、そんなことはどうでもいい気分だった。とあるが、このときの「僕」の気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア ガイドの息子だと知られてしまったことを、ツアーと合流したときのように母に打ち明けたらよいか思い悩んでいる。

イ ガイドが母であることを見抜かれて心配ではあるものの、親しくなった男と共にドライブすることに心地よさを覚えている。

ウ 親子の秘密を知られてしまったため、二人でいることが気ま

ずくなり、早く母のいるツアーに戻りたいとあせっている。

エ 親子だと見抜かれたことも気にならなくなるほど、母に代わ

ってガイド役を上手に務めることができて誇らしく思っている。

〔問2〕 (2) どんなに大丈夫だと言いつても、そうする自分を止められなかった。とあるが、「僕」が「どんなに大丈夫だと言いつても、そうする自分を止められなかった」わけとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 母のガイドをまねて名所をうまく説明しながらも、男がツアーに対する不満を言い出すのではないかと気をもんでいたから。

イ ガイドを上手にこなしながらも、内心では男をツアーに合流させることができないのではないかと不安に駆られていたから。

ウ 初めてのガイドを何とか務めながらも、名所の説明が不十分であることを男に指摘されるのではないかと気が気でなかったから。

エ 細心の注意を払ってガイドを続けながらも、これから立ち寄る見学先でうまく説明ができなかったらどうしようかと心配だったから。

〔問3〕 (3) 「はい、分かります。」とあるが、この表現から読み取れる「僕」の様子として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 優秀な題名屋だと自称する男について、本当なのかどうか疑ったことを反省し、素直に謝罪の気持ちを伝えようとしている様子。

イ しばらく黙っていた男が突然言葉を発し、考える間もなく同意を求めてきたことに対して、懸命に答えようとしている様子。

ウ 本当は真意が分からなかったけれども、男に対する気遣いと申し訳なさから、男の言葉をひとまず受け入れようとしている様子。

エ 思ったより男が年老いていたことに気付き、これ以上疲れさせないように話題を変え、ガイドを再開しようとしている様子。

〔問4〕 (4) 男は黙つてうなずき、夜の闇がすぐそこまで迫っている

空の一点を見据えた。瞬きもせず、声も漏らさず、息さえ聞こえてこなかった。とあるが、この表現について述べたものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 「僕」の一日に捧げる題名を付けようとして、心を集中させている男の様子を、短い言葉を重ねることで印象的に表現している。

イ 予想していなかった「僕」の求めに、どのように応じたらよいか苦慮している男の様子を、細部までありのままに表現している。

ウ 「僕」と過ごした時間を振り返り、別れを惜しむ気持ちを悟られないように隠している男の様子を、順序立てて丹念に表現している。

エ 刻一刻と暗くなる夕暮れの情景と、「僕」の願いを聞いて夢中になって作業に取り組む男の様子とを描き分け、対照的に表現している。

〔問5〕 (5) それ为题名なのだ、すぐに分かった。とあるが、あなたが「僕」だとして、このときの「僕」の気持ちを母に伝えるとしたら、どのように言うか。あなたの話す言葉を五十文字以内でまとめて書け。なお、や、などもそれぞれ字数に数えよ。

〔四〕 次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。(＊印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。)

集落周辺の森、里山は経済と一体となって存在する。自然林を繰り返し伐ることによりつくり出された里山の森は、広葉樹が中心で、そこから建築材や道具用の木材、薪及び炭を得るばかりでなく、農家の日常の燃料である柴を刈ってくる。農家の重要な労働力である牛馬のエサとなり寝床となる草を刈る。秋には落ち葉を掻き出し、堆肥とする。もちろん、その間、山菜やキノコ、ユリ根、山芋などを得、食卓を飾る。地域によつては焼畑も行っていた。このように里山は農家の必要なさまざまなものを提供していた。(第一段)

この長年にわたつて農村経済を支えてきた里山に、昭和三〇年代に大転換が起きた。耕耘機が各農家に入り、牛馬が要らなくなり、肥料は堆肥に代わつて化学肥料で済ませる。生活のエネルギーは薪炭から石油、ガス、電気へと代わつた。その結果、それまでは薪を取るにしても何にしても、すべてのものがこの里山からもたらされてきたのが、それが要でなくなつてしまった。そして、当然の帰結として山が放置されるようになってしまった。(第二段)

(1) 里山が里山として存続することが可能であるためにはそれに見合う経済効果をもつことが必要である。その一つには経済効果の算出基準の手直しが要る。我が国では久しく水と空気はただであった。今、水がただであるとの考えは急速に改まってきているが、まだ空気はただである。しかし、空気も水と同様に人類を含めた地球生物にとつて良好な状態に保つには、多大な経済的投資が必要なことは誰もが薄々と感じ始めている。実際、地球温暖化防止会議では\*炭酸ガス放出量の算定に当たつて森林の面積が大きな要素として取り入れられた。(第三段)

若い森林は旺盛な成長に伴つて大量の炭酸ガスを固定し、木材として蓄積するが、森林が老齢になるとそれ以上の蓄積はわずかとな

る。里山の雑木林はまさに「常に若い林」である。この若い林の状態を続けるにはある程度成長したところで、木を伐らねばならない。しかし、木を伐つて燃やすなり分解するなりしてしまえば、再び炭酸ガスが空気中に戻るではないか、という指摘がある。確かにそのとおりである。が、燃やすことよって出るエネルギーをかつてのように生活のエネルギーとして利用することができれば、その分、化石燃料の消費を減らすことができる。さらに、木炭などを生産して活性炭などに利用した後に燃やすなり土壌改良材として土地に戻すなりに利用が図られればその分、さらに炭酸ガスの放出を減らすことになるだろう。(第四段)

森林の果たしている機能について確認をしたが、現在の経済システムにおいてはこれらの機能は金銭に換算される経済的な評価を適切に受けているとは言えない。かつてはそのような価値はあくまでも付随的で、そのような森を存続させながら生産物である木材を切つて売ることにより林業は成り立ち得た。(2)しかし、現在は特殊用途の木材で、しかも量を少量に限定してかろうじて経済性をもつのみで、三八〇〇万ヘクタールの国土の六・六割を占めている森林の大部分は、対価なしに存在することを求められていると言つても過言ではない。(第五段)

しかし、我々はこの森林面積を半分あるいはそれ以下に減らして土地の有効利用を図ろうと考えるだろうか。否である。大規模な森林の喪失を誰も望んでいないと言える。森林の喪失が住環境の悪化を招き、我々自身の存在自体を脅かすものであることを本能的に知っているからである。森林の、それも健全な森林の存続を求めるならば、良質で豊富な水資源、清浄な空気、快適で健康的な生活環境など、森林が存在することよって流域の企業や住民が受けている利益を適切に森に返す仕組みの整備が求められている。(第六段)

森林が存在すること自体で、我々が得ることのできる恩恵のみが

森林の利用価値のすべてではない。森林は利用してこそ価値が高まる。利用するというのには、レクリエーションなど存在それ自体を利用することもあるが、ここで言うのはそうではなく、木を伐り、木材を利用することである。(第七段)

森林がもつ最大の武器は再生産能力である。これは何も樹木だけではなく、すべての生物に共通のことであるが、地球の、特に陸地の環境形成に大きく寄与している陸上生態系の大きな要素の一つが森林である。大量の化石資源あるいは埋蔵資源の消費によつて引き起こされている急激な地球環境の悪化を押しとどめ、改善する方策の基本は、持続可能な資源の利用である。再生産可能な範囲での資源利用を図ることにより、悪化の速度を鈍らせ、さらに徹底すれば改善も可能である。エネルギー源として太陽光、風力、波力、地熱などが挙げられるが、そこに木材資源を加えることも不可能ではない。しかし、木材資源はエネルギー源にする前に天然素材資源として十分大きな役割を果たすことが可能である。(第八段)

近代から現代への工業化は、均一な素材を大量に使つて均一な規格の製品を大量に生産することで発展してきた。しかし、地球はそれを今後も永続的に続けることはできないということを我々に示している。我々の生活の仕方を根本から変えて、再生産可能な資源を使つて多様な規格の製品を小規模に、しかし、くまなく利用することにより、快適で健全な生活を図ることが求められている。使用済みや壊れたプラスチック製品を、人々の健康を害さないように処分するのには大変な経費と資源を投資しなければならぬ。そのことが分かった今、多少不便で、長持ちしなくとも自然に戻すことができる木材資源を活用した方が、結局は経済的に見合うことを真剣に考える必要がある。(第九段)

里山は定期的な木を伐つて初めて健全な森として機能する。よく手入れされたスギやヒノキの人工林は、天然林より森の機能は多少

劣つても、優良な木材資源を我々に与えてくれる。天然林は国土の保全、\*水源涵養に大きく働くとともに、豊かで多様な生物界を支えてくれる。(3)日本人の長い歴史の中で築き上げられてきたこの森と人のシステムは、地球生態系の一部として矛盾が少なく、しっかりと組み合わさって安定しており、持続的に循環可能である。この森のシステムを放棄してしまったのはそんな古いことではなく、ここわずか三〇、四〇年ばかりのことであり、幸運にもまだシステムが忘れ去られてはいない。(第十段)

森の恵み、木の文化にもう一度光を当て、このシステムを現在の改善して再度動かしていくことが、地球生物系が健全に生存可能な二一世紀の地球環境を、我々人類がつくってゆくことにつながる。(第十一役)

(鈴木三男「日本人と木の文化」による)

〔注〕 炭酸ガス——二酸化炭素。

水源涵養——水源を保ち育てること。

〔問1〕 (1) 里山が里山として存続することが可能であるためにはそれに見合う経済効果をもつことが必要である。とあるが、筆者がこのように述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 農村経済のあらゆる面を支えてきた里山の価値に加え、これからの里山には現代の農村生活に合った新しい価値も必要だと考えたから。

イ かつて里山が供給する水や空気に価値を見出すことはできなかったが、現代ではこれらの商品的価値を模索する必要があると考えたから。

ウ かつて里山が農家に必要なものを提供することで価値を保つたように、現代の里山も経済的投資に値する価値が必要だと考えたから。

工 経済的な側面からとらえてきた里山の価値を見直し、これからは地球生物が共存する場としての価値を追求する必要があると考えたから。

〔問2〕 (2) しかし、現在は特殊用途の木材で、しかも量を少量に限定してかろうじて経済性をもつのみで、三八〇〇万ヘクタールの国土の六・六割を占めている森林の大部分は、対価なしに存在することを求められていると言っても過言ではない。とあるが、ここでいう「対価なしに存在することを求められている」とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 炭酸ガスを蓄積する機能より木材を売ることに価値をおく現在の林業においては、森林の経済効果は適切に評価されていないということ。

イ 国土の森林の大部分は特殊用途の木材にしか適していないため、木を切って売っても林業として経済的に成り立たないということ。

ウ 森林の喪失が我々の生存にかかわるといふ点においては、どのような森林でも経済性とは関係なく必要とされているということ。

エ 国土の森林の大部分は老齢化して成長が止まっており、炭酸ガスを木材として蓄積することがないため、経済性が極めて低いということ。

〔問3〕 この文章の構成における第七段の役割を説明したものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア それまでに述べてきた森林の機能という内容を受けて、その根拠となる事例を付け加えて問題解決の手順を示している。

イ それまでに述べてきた森林の利用という内容に対して、それと反対の内容を具体例と共に提示して話題の転換を図っている。ウ それまでに述べてきた森林の効果という内容に基づいて、そ

のあらましを順序よく整理して分かりやすく説明している。  
エ それまでに述べてきた森林の価値という内容について、新たな観点に基づく考え方を示して論の展開を図っている。

〔問4〕 (3) 日本人の長い歴史の中で築き上げられてきたこの森と人のシステムは、地球生態系の一部として矛盾が少なく、しっかりと組み合わさって安定しており、持続的に循環可能である。とあるが、筆者がこのように述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 製造に多くの経費と資源を費やすプラスチックに代わり木材を使うことで、合理的かつ経済的な大量生産の仕組みができる  
と考えたから。

イ 再生産可能な資源としての森林はよく手入れして利用すること  
とで、環境への負荷が少ない持続的な仕組みとして機能すると  
考えたから。

ウ 化石資源や埋蔵資源と再生産可能な木材資源を併せて用いる  
ことで、環境悪化の解消と各資源の持続的利用が可能になると  
考えたから。

エ 里山は人の手が入ることなく環境が保持されることで、天然  
林に匹敵する優良な木材資源の安定した供給源になると考えた  
から。

〔問5〕 国語の授業でこの文章を読んだ後、「森林の価値」という  
テーマで各自の見聞や、具体的な体験を示して意見を発表するこ  
ととする。このとき、あなたが話す言葉を二百字以内で書け。な  
お、書き出しや改行の際の空欄、や、や「なども、それぞれ字  
数に数えよ。

## 五

次の文章を読んであとの各問に答えよ。なお、あとの□の  
中のa及びbは、それぞれ本文中に引用されているA及びBの  
「万葉集」の和歌の現代語訳である。(＊印の付いている言葉に  
は、本文のあとに〔注〕がある。)

古代以降、都の郊外は<sup>(1)</sup>少なからず開発の波が押し寄せ、かつて  
の自然がそのままに残されていることはなかったであろうが、それ  
に代わって、そこには人の手が加わった半自然が新たに形成されて  
いたであろう。萩をはじめとする秋草が＊繚乱と咲き乱れる野は、  
そうした自然の一つであったと思われる。そしてその秋の野の秋草  
の花の美に心魅かれ、それを歌に託した歌人がいた。山上憶良で  
ある。

A 秋の野に咲きたる花を指折り かき数ふれば七種の花

秋の七草をよんだ歌として、いわばわが国の秋草の歌の＊嚆矢と  
も言うべきものだが、憶良はその七草を、

B 萩の花＊尾花葛花くきはななでしこが花 をみなへしまた藤袴朝顔が  
花

という七種に決定している。その中でも萩は、憶良によって最初  
によみ上げられており、秋草の中で最も注意を惹き、目立つ花であ  
ったような印象を受けるが、事実それは以後の萩への人々の好尚を  
見れば、首肯されてよいことであつたと言える。早くに万葉の歌人  
たちの作品の中にも、

秋萩に恋尽つくさじと思へども しゑやあたらしまたも逢あはめやも  
(秋萩を恋して、心を傾け尽すまいと思うけれど、惜しくてど

うにもならないよ、こんな美しい花に二度と逢えようか。)

(2) というような、恋という言葉に示される萩への深い傾倒ぶりを示す歌が散見される。すでにこの時代、萩の花はその美しさにおいて、人々の恋の対象にさえなりつつあったのである。

平安時代に入っても、人々の萩への関心はとどまるところを知らなかった。とりわけ庭の前栽(植え込み)の発達は、人々が屋敷の中に人工的な自然空間を形成していく上で効力を発揮した。彼らは野に出ることがなくても、屋敷の中で居ながらにして秋草の美を觀賞し得るに至ったのである。(3) そしてそれは、秋草などの植物を見る彼らの眼を、いつそう細やかなものにしていった。

たとえば観察力という点で、平安時代においてたぐいまれな力を発揮した清少納言は、『枕草子』の中で、萩を次のようにスケッチしている。

(4) 萩、いと色深う、枝たをやかに咲きたるが、朝露にぬれて、すらむも、心ことなり。

(萩は、色がとても濃くて、枝がしなりたわんで咲いたのが、朝露にぬれて、しなやかに広がり伏しているのがよく、さを鹿がとくに好んで馴れ立つのも、格別の趣きがある。)

彼女は萩を描写するにあたって、とくに二つの点に筆を及ぼしている。一つは、枝をしなやかにたわませ、枝葉を広げている状態で、萩の形状の特徴と言っているだろう。またもう一つは、萩が朝露に濡れている様である。露が置く萩の美は、万葉の時代から歌人たちの注意を惹き、萩の露はくり返し歌によまれてきた。(5) それはおそらく、その美しさが他の秋草にぬきんでいたからであろう。実際

早朝の秋景の中で、萩の露だけがことさらに白玉のように輝いている様を目にすることがある。それは萩の葉の表面にある永存性の微細な\* 圧毛と水滴との微妙な関係によるのであるが、確かに萩の露は人々の関心を集めるに十分な輝きを持っている。

(注) 繚乱——花などが咲き乱れるさま。  
(川村晃生「日本文学から『自然』を読む」による)

嚙矢——最初。

尾花——ススキ。

さを鹿——雄鹿。

圧毛——葉や茎などの面に密着して寝ている毛。

a 秋の野に 咲いている花を 指を折って 数えてみると

七種の花

b 萩の花 尾花に葛の花 なでしこの花 おみなえし それ

に藤袴 朝顔の花

(小島憲之、木下正俊、東野治之「万葉集②」による)

〔問1〕 (1) 少なからずとあるが、これと同じ意味・用法で「少なからず」を用いて、二十五字以上三十五字以内で文を作れ。なお、や、などもそれぞれ字数に数えよ。

〔問2〕 (2) というような、恋という言葉に示される萩への深い傾倒ぶりを示す歌が散見される。とあるが、ここでいう「萩への深い傾倒ぶり」について説明したものと最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 萩に恋していることを他人に知られまいと努力してきたのに、最後まで隠し通すことができず、いまいましく思っている様子。  
イ どんなに夢中になるまいと距離をおこうとしても、萩を恋しく思う気持ちを抑えきれず、心を奪われてしまっている様子。

ウ 萩の美しさを心行くまで味わおうとしても、なかなか萩を独占して見ることができず、惜しくてあきらめきれない様子。

エ 萩の美しさを余すところなく表現しようとしても、どうしてもうまく歌によむことができず、思案に暮れている様子。

〔問3〕 (3) そしてそれは、秋草などの植物を見る彼らの眼を、いっそう細やかなものにしていった。とあるが、ここでいう「彼らの眼を、いっそう細やかなものにしていった」とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 屋敷内で鑑賞できるようになったことで、植物に興味をもつ人が多くなり、楽しみ方もさまざまに広がっていったということ。

イ 栽培技術の発達によって、植物の愛好家たちが楽しむことのできる萩の種類が増え、人々の好みが多分化していったということ。

ウ 人工的な自然空間の増加に伴って多くの歌がよまれるようになり、人々の和歌を鑑賞する機会がより増えていったということ。

エ 屋敷の中で草花を楽しむようになったことにより、人々の植物を観察する力がそれまで以上に磨かれていったということ。

〔問4〕 (4) 「なよなよ」とあるが、ここでいう「なよなよ」の意味に相当する部分を、本文中の現代語訳からそのまま抜き出して書け。

〔問5〕 (5) 「それはおそろく、その美しさが他の秋草にぬきんでいたからであろう。」とあるが、ここでいう「ぬきんでていた」の意味に最も近いのは次のうちではどれか。

ア ひとときわ優れていた

イ 互いに張り合っていた

エ 適切に評価されていた

ウ あまねく知られていた

# 平成23年度

解答用紙

## 国語

一	(1) 勸誘	(2) 阿翼	(3) 謹んで	(4) 調す	(5) 典雅
---	--------	--------	---------	--------	--------

二	(1) ウチユウ	(2) ジュクして	(3) ソウカン	(4) エンゲキ	(5) カブ
---	----------	-----------	----------	----------	--------

(注) この解答用紙は縮小により、  
 実物を約65%に縮小してあります。  
 153%の拡大コピーによりほぼ原寸大で  
 使用する事ができます。

三	[問1]	[問2]	[問3]	[問4]	50 25
	[問5]				

四	[問1]	[問2]	[問3]	[問4]	25 100 200
	[問5]				

五	[問1]				35	25
	[問2]	[問3]	[問4]	[問5]		

時間

一 (計10点)					二 (計10点)					三 (計25点)					四 (計30点)					五 (計25点)				
(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	問1	問2	問3	問4	問5	問1	問2	問3	問4	問5	問1	問2	問3	問4	問5
2点	2点	2点	2点	2点	2点	2点	2点	2点	2点	5点	5点	5点	5点	5点	5点	5点	5点	5点	5点	10点	5点	5点	5点	5点

# 国 語

## 解 答

- 一 (1) かんゆう (2) りょうよく  
(3) つつし (4) うるお (5) てんが
- 二 (1) 宇宙 (2) 熟 (3) 創刊 (4) 演劇  
(5) 株
- 三 〔問1〕 エ 〔問2〕 イ  
〔問3〕 ウ 〔問4〕 ア  
〔問5〕 (例)今日は忘れられない一日になったよ。ガイドは、人の思い出にかかわることのできるすばらしい仕事だね。(48字)
- 四 〔問1〕 ウ 〔問2〕 ア  
〔問3〕 エ 〔問4〕 イ  
〔問5〕 (省略)
- 五 〔問1〕 (例)勉強嫌いの彼が高校に合格したと聞いて、少なからず驚いた。  
〔問2〕 イ 〔問3〕 エ  
〔問4〕 しなやかに 〔問5〕 ア

### 一 〔漢字〕

- (1)勧めて誘うこと。 (2)飛行機などの左右のつばさ。 (3)音読みは「謹慎」などの「キン」。 (4)ほかの訓読みは「うるお(う)」「うる(む)」。音読みは「湿润」などの「ジュン」。  
(5)正しく整っていて上品な様子。

### 二 〔漢字〕

- (1)天体の存在する空間。 (2)訓読みは「う(れる)」。(3)書籍や雑誌などを新たに刊行すること。 (4)物語などを、俳優が舞台上で演じて見せる芸術。 (5)社会や仲間うちでの評価。

### 三 〔小説の読解〕 出典：小川洋子『ガイド』。

〔問1〕<心情>「僕」は、観光ガイドとして「自分でも不思議なくらい、滑らかに喋って」おり、「得意な気持が表情に出ないようにする」ほどだった。母の代わりに仕事を務めることができ、気持ちが高ぶっているので、「僕」は、親子だということを見抜かれても、気にならなくなっていた。

〔問2〕<文章内容>「僕」は、遊覧船に乗り遅れた男を、ツアーに合流させるよう母に頼まれた。順調にガイドの仕事はこなしていたものの、無事に使命を果たせるかどうか不安に思っていたので、「僕」は母から預かったお金があるかどうか、何度も確認したのである。

〔問3〕<文章内容>「僕」は、男の「詩など必要としない人は大勢いるが、思い出を持たない人間はいない」という言葉の意味が理解できなかったが、「彼をがっかりさせないため」に、また、親子であることを隠していたことへの「罪滅ぼしをする」気持ちもあって、とりあえずわかったふりをした。

〔問4〕<表現>男は、「今日の僕の一日に、題名をつけてほしいんです」という願いを聞き入れ、黙ってうなずいて考え始めた。男が集中している様子が、「瞬き」「声」「息」についてのたたみかけるような短い文の連続で描写されている。

〔問5〕<心情>男が言った「思い出を持たない人間はいない」という言葉は、「今日一日を記憶に刻み付けておく」ための「僕」への言葉である。「僕」にとっての今日は、ガイドという初めての体験をした思い出深い日である。「僕」は、その体験を通じて得たものを母に語ったと考えられる。

### 四 〔論説文の読解—文化人類学的分野—日本文化〕 出典：鈴木三男『日本人と木の文化』。

<本文の概要>昔の里山は、木材や草や食べ物など、農家に必要なさまざまなものを提供することによって、自らの存在を維持し、農村を支えてきたが、機械の導入やエネルギーの転換によって、里山から提供されるものが農村にとって必要なくなるにつれて、里山は廃れていった。つまり、里山が里山として存続するためには、経済効果をもたらす価値が必要なのである。しかし、現在は、対価なしに森林が存在している状態である。だから、木を伐採し、木材を利用することによって、森林の利用価値を高めるといふ発想が必要になる。森林は、再生産能力が高く、エネルギー源としてのみではなく、天然素材資源としても大きな役割を果たす。プラスチック製品を処分するには、多大な経費と資源の投資が必要となるが、自然に戻ることができる木材資源を活用すれば、経済的にも利益がある。歴史の中で築き上げられた森と人とのシステムによってもたらされる森の恵みに、もう一度光を当てることが大切である。

〔問1〕<文章内容>かつての里山は、道具用の木材、薪や炭、燃料となる柴、牛馬のエサとなる草など、さまざまなものを農家に提供してきたが、農家が里山からの提供を必要としなくなると、里山は廃れてしまった。つまり、「里山

は経済と一体となって存在する」ものなので、経済的に投資する価値があるものでないと、存続させることはできないのである。

〔問2〕〈文章内容〉林業は、木材を売ることによって成り立っていたが、現在、売るための特殊用途の木材は、少量に限定されている。つまり、売ることだけを目的に考えるならば、森林の大部分は対価なしに放置されていることになるが、実際に森林は、炭酸ガス放出の削減に役立っている。だから、森林の価値をもっと認めてもよいのである。

〔問3〕〈段落関係〉特殊用途の木材は、少量に限定されているから、木材を売ることによって価値を置くことはできず(…第五段)、森林の面積を減らして土地の有効利用をすることも適切ではない(…第六段)。だから、森林の利用価値を、「木を伐り、木材を利用すること」へと向けていくべきなのである(…第七段)。

〔問4〕〈文章内容〉近現代の工業は、均一な素材を大量に使って、均一な規格の製品を大量に生産することで発展してきた。しかし、使い終えたプラスチック製のものなどを安全に処分するには、多大な経費と資源を投入しなければならず、また、製品をつくるための資源にも限りがあるので、永続的にこの生産を続けていくことはできない。そこで、再生産能力があり、自然に戻すことが可能な木材資源を使用すれば、環境への負荷も少なくてすみ、持続的な循環が可能になる。

〔問5〕〈作文〉かつての里山が、人間に経済的な恩恵をもたらし、自らの存続と同時に農村の生活を支えていたのもそれほど昔のことではないが、現在ではこのような持続的に循環可能な「森と人とのシステム」が十分に活用されているとはいえない。このような視点から、森林の価値について、自分の体験や見聞をふまえたうえで考えてみよう。実際に書くときには、主語と述語のねじれはないか、誤字や脱字はないかなどに注意し、原稿用紙の正しい使い方を意識しながら書き進めていくことが大切である。

〔五〕〔説明文の読解—芸術・文学・言語学的分野—文学〕出典；川村晃生『日本文学から「自然」を読む』。

〔問1〕〈語句〉「少なからず」は、量が少なかったり程度が軽かったりしない様子。わりと多い様子。

〔問2〕〈文章内容〉「傾倒」は、ある物事に強

く心を引かれて夢中になること。憶良は、秋萩のあまりの美しさに、恋しいと思う気持ちを抑え切れなかったのである。

〔問3〕〈文章内容〉清少納言は『枕草子』の中で、萩をスケッチするように細かく描写している。平安時代に入って前栽が発達したことにより、人々は、屋敷の中でも秋草を觀賞できるようになったので、人間の観察力は鋭くなったのである。

〔問4〕〈現代語訳〉萩は、朝露にぬれて「しなやかに」広がり伏しているのである。

〔問5〕〈語句〉「ぬきんでる」は、一段と優れている、という意味。朝露にぬれた萩の美しさは、ほかの秋草の中にあっても一段と優れていたもので、歌人たちに注目され、何度も和歌に詠まれてきたのである。

### ＝読者へのメッセージ＝

山上憶良は、『万葉集』に和歌がたくさん選ばれており、奈良時代を代表する歌人として知られています。また、遣唐使として唐に渡り、当時としては最新の学問を学んで帰国しました。